

追悼文

## 一番ヶ瀬先生を偲んで

— 先生と科誌『社会福祉』 —

学科長 沈 潔

一番ヶ瀬康子先生（名誉教授・理事・評議員）は平成24年9月5日にご永眠されました（享年85歳）。

先生は第二次大戦中、日本女子大学を受験するため、長い船旅を経て台北から日本女子大学家政学部第3類（社会事業専攻）を受験し、ご入学されました。敗戦による繰り上げ卒業後は、上田の鐘紡丸子工場などで働く人々の生活相談や附属丸子高等文化学院主事として年少労働者問題に直面し、心に深く刻まれたようです。先生の社会福祉研究の基礎はこの時期に築かれたといえます。1953年、当時の日本女子大学社会福祉学科主任菅支那教授に招かれ助手として母校に戻られて以来、教員、学校法人理事、人間社会学部の創設者として初代学部長を務めなど、研究、教育、学校経営にご尽力されました。

ご周知のように、先生は日本の社会福祉学の草分け的存在で、研究視野を次々と切り拓いて来られました。先生は、日本社会福祉学会の会長を長く務めておられたほか、後進に道を拓くため、福祉文化学会、介護福祉学会、日本福祉まちづくり学会などを創設し、自ら会長を務め、日本社会福祉の学術の発展に大きな足跡を残されました。考えてみれば、先生の社会福祉観の形成や社会福祉を追求する熱意の原点は、社会福祉学科にあるものではないかと思えます。

実は、先生の先見性に満ちた多くの輝かしい偉業の中であまり知られなかったこととして、科誌『社会福祉』の創刊が挙げられます。先生は、1954年、助手に就任されて間もなくから、助手や学生によびかけて研究会を立ち上げ、その活動を通して研究誌の必要性を感じ、学科の研究誌刊行を提案されました。自ら編集業務を引き受け、1994年定年退職まで、40年にわたって科誌の『社会福祉』を通じて数多くの学生を育てました。

本号で『社会福祉』は53号となります。これまで刊行された『社会福祉』の各号を辿り、先生との魂の交流を続けながら、社会福祉研究教育の喜びを分かち合い、さらにまた自身の研究教育に励んでいきたいです。

一番ヶ瀬先生が『社会福祉』に寄稿した論文や記事を以下にまとめておきます。

### 一番ヶ瀬先生が『社会福祉』に寄稿した論文と記事一覧

刊行号・年	テーマ	備考
第1号 1954	社会事業家伝 石井亮一氏	
第2号 1955	John locke の貧困児童観	
第3号 1956	成瀬仁蔵氏の「社会事業教育観」	
第4号 1957	明治前期年少労働史論（一）一年少労働の創出—	

第5号 1958	生江先生を偲んで	
第6号 1959	アメリカ社会福祉発達史研究に関する若干の問題提起 —比較史的方法のための一試論—	
第7号 1960	アメリカ社会保障の成立と社会事業	
第12号 1965	社会事業現代史研究序説	
第14号 1967	母子保護法制定推進運動の社会的性格について —母子保護法制定史(1)— 家庭児童の福祉に対する地域活動上の諸問題(共著) 篠崎茂穂先生について	
第15号 1972	巻頭語 序にかえて	
第24号 1983	日本女子大学社会福祉学科生の傾向と特質 —調査報告—	学生と共著
第25号 1984	荒川区における福祉計画とその実践的検討(1)—老人生活実態調査を中心に—	学生と共著
第26号 1985	荒川区における地域福祉計画とその実践的検討(2)—老人生活実態調査を中心に—	学生と共著
第27号 1986	荒川区における福祉計画とその実践的検討(3)—老人生活実態調査を中心に—	学生と共著
第28・29 合併号 1988年	① How to promote Human Rights Education in the Japanese Educational System of Social Welfare ② 社会福祉学科のむかしといま	
第34号 1993	故 小島蓉子教授を想う	
第35号 1994	日本女子大学社会福祉学会設立記念講演「日本の社会福祉を考える」	

出典：日本女子大学社会福祉学科『社会福祉』各号の目次より

『社会福祉』に寄稿した論文を見る限り、先生が我が学科の研究、教育の発展に東奔西走された姿が目には浮かびます。先生が学科の研究教育の基礎を作った際には、以下の3つの思いがあるのではないかと思います。

一つ目は、学科の先達でもある初代学長成瀬仁蔵や社会事業理論の先駆者である生江孝之先生らが、切り拓いてくれた社会事業に関する理論の整理と展開です。先生は、助手に赴任してまもなく、「成瀬仁蔵の社会事業教育観」、生江孝之先生の口述史の整理などに関わられて、資料紹介として「社会事業教育特集」を公表されました。先生がまとめられたこの資料は、今の社会福祉学科の教育理念や教育史を理解するための貴重な文献となっております。

二つ目は、社会福祉の実践教育です。先生は学生を引率し、児童、高齢者、貧困者の生活に関する実態調査を行い、福祉実践の大切さを常に学生に実感させるような福祉の実践教育に力を注いでこられました。その福祉実践を大切にされる精神は現在も活かされているところです。

三つ目は、研究教育環境の改善です。科誌『社会福祉』が1954年に創設された後、様々な事情によって1968年に休刊されました。休刊から5年後の1972年、先生のご尽力により復刊出来るようになりました。その復刊にあたって、先生が第15号の巻頭語にこのように書かれました。

「5年前、14号を発刊して以来、しばらく休刊していたこの研究誌を、私たちは、再び発刊することにした。……今日この15号発刊にあたり、私たちはまさに現代において社会福祉研究こそがいかに必要であるか、またそれに参加する私たちの責任がいかに重いかを、痛切にそして深く感じている。……研究室半世紀の歩みを無駄にせず、しかも現代の挑戦に存分に答え

うるよう、私たち一人一人の成果とともに研究室員のエネルギーが、今後この誌に盛り込まれていくよう努力することを誓いつつ、序にかえたいと思う。学内、学外の関係者の方々にとどまらず、日本の社会福祉が、この激しい歴史の流れのなかで、正しく進展することを願う方々の、より一層のご声援、ご協力をお願いします。」(第15号1pより)

一つの機関誌が順調に発展するためには、幾つかの山を乗り越えることが必要です。先生のご尽力がなければ、この山を乗り越えることが出来ず、科誌『社会福祉』は消えていたかもしれません。そのように考えてみると、感謝の気持ちが自然にわき起こります。

そして、1994年、先生の定年退職を控え、先生が最後の最後まで社会福祉学科の発展に心血を注いだのは、日本女子大学社会福祉学会を創り上げたことです。第35号に、先生の学内学会設立総会記念講演として「日本の社会福祉学を考える」が掲載されました。

講演の中では、学内学会が必要である理由について以下の通り述べられました。すなわち、学会の研究活動を通じて日本社会福祉の歴史・現状・課題を正しく理解すること、また、すでに卒業されて福祉の現場で活躍している卒業生の生涯学習を支えること、そして、これから巣立つ卒業生の就職のためにネットワークをつくることにあるとおっしゃっていました。

日本社会福祉学の構築に関して、先生が歴史・現状・課題という3つのテーマを提示しながら斬新な見解を明示してくれました。当時、10番教室で拝聴していた私の心に響いたのは、東アジア社会福祉研究に対する見方でした。先生は「歴史面でも、さらにその他の面でも遅れていますのは、アジアの問題です。あらためて考えなければいけない時期に来ていると言うことであります。欧米からの当てはめで済んで来た時代が終わって、日本の現実からの発想を今や国際化時代、グローバルに地球を見つめて展開しなければならない時に、まず近隣アジアの社会福祉のあり方を検討する、その方法、タイアップを考えなければならないと思っております。一方で日本の社会福祉発達史の中で大きく無視、かつ欠落しております旧植民地時代の社会福祉の歴史もあり、日本の近代に連なる問題でもあるということでもあります。・・・中国の沈さんが「満州国」の社会事業史をやっておりますが、そういうことの成果があがってくれば、アジアの問題というものに対してのアプローチが、ここからももっと明解になるであろうと思います。」(第35号32pより)

1990年代頃、日本の東アジアへ対する関心度はまだまだ低かったのですが、一方で、私は長い間タブー視されてきた日本植民地「満州国」の社会事業を博論のテーマに設定し、中国側の一部の人の批判を浴びていたところでした。そのため、先生のお話は私にとって大きな励みとなりました。

日本女子大学の定年後、すでに70歳を越えた先生は、九州地域に社会福祉の大学院がないことから、長崎純心大学の依頼を受けて赴任し、博士課程前期、後期揃った大学院を創り上げました。後期課程の中に日本初といわれる東アジア社会福祉比較の科目を設け、私



一番ヶ瀬康子先生

がその科目の担当に任せられました。また、2003年頃、先生が主宰した「東アジアカトリック社会福祉比較研究」の科研プロジェクトのメンバーにも加えて頂き、定期的な研究会にも通っていました。ほぼ10年間、長崎純心大学に通って、先生と心おきなく話す機会が増え、先生の東アジア社会福祉へのお考えや思いなどに対する理解がより深められたと思います。

今の私の研究教育の主軸は東アジア社会福祉に傾いています。もし先生が東アジア社会福祉研究の道を切りひらいてくれなかったら、そして、もし東アジア福祉比較の科目を担当するという試練の舞台をつくってくれなかったら、今の私はいないでしょう。一方、その責任の重大さも実感しつつあります。

そして、学科の中央研究室に保管された先生の原稿に目を通すとき、1984年に一番ヶ瀬先生が、恩師の菅支那先生を偲び、執筆、編集した『菅支那先生との出会い』を発見しました。一番ヶ瀬先生がはじめに書かれたことばに共鳴しました。

今日、教え子の私たちが同じ思い、同じ気持ちでこのことばを恩師の一番ヶ瀬先生に捧げたいと思っています。こうして社会福祉学科の素晴らしい伝統を守り、代々伝えられていけば、天国にいる一番ヶ瀬先生もきっと喜ぶでしょう。

「先生の純粋でおおらかなお人柄と、その情熱あふれる母校日本女子大学への想い、さらに教え子一人一人への誠実な教えは、今更のごとく、ますます鮮明にそして心に深くよみかえってくる。

先生への想いを、改めて心に刻み、先生がもっとも大切にされた人生での“出会い”を、各自が改めて人生の糧とする・・・。」

「この記録は、当日参加した各自の記念として、まず何よりも意味があることは言うまでもない。しかし、それだけではなく、母校の教育、女子教育さらに社会福祉教育に先生がのこされたその足跡を明らかにし、教育者菅支那先生のお生涯とその影響を明らかにする意味もあろうかと考える。」

「ことに偉大な教育者とは、たんに肩書きや、世に認められた事績によるものだけでいえるものではない。なによりも、その生きざまを通じて、強いインパクトを学生にあたえ、その感動をもって各自の道を選ばせ、前進させる力を持った人を言うのではないだろうか。」

『菅支那先生との出会い』1pより

先生の教えを守り、より良い研究教育を目指します。

安らかに眠りください。ご冥福をお祈りいたします。

素晴らしい先生—— 一番ヶ瀬康子先生、本当にありがとうございます。



一番ヶ瀬先生と学科教員一同